

侯を侵陵する炎帝を討伐して、天下を平定したので諸侯は軒轅氏を天子とし黄帝と号した。その後、黄帝は山野を治めて道路を通じ区画を設けて百郡に分け、推歩曆算を学び、診察法を学び、また黄帝みずから七情・十義の倫理を定め、泰山に登り封禅を行った。巻中では、長生久視を獲んことを願って神仙を求めて蓬萊をも訪ね、ついで天を圓丘に祭り、さらに王屋山に登り石函を開き九鼎神丹経を得て、神丹を九転する口訣を玄女から受けたと述べる。巻下では先ず、黄帝は「天皇真一之経」を見たが「三一真氣の要」が解し得なかったもので、これが釈解を求めて四方を周流し、遂に峨嵋山の仙宮に住む天真皇人に会って、「真一五芽之文」すなわち「真一之道」を盛った文を授かり、かくして黄帝は九鼎の丹を煉り、丹が成りこれを服して昇仙する(天仙)。

#### 篤胤の著述の意図

(一)泰一小子の名を南宋・羅泌『路史』後紀・炎帝(神農)紀に見出し、これを少毘古那神に比定し、さらに、伏羲を大圀主神であるとし、青真小童君(青童君)は、その注釈によると少毘古那神(少彦名命)に相当するともいう。黄帝に「真一之道」を盛った文を授けた九天真王は実は青童君にほかならないという。大圀主神は「扶桑君と称する東王父」であり、「此は疑なく大圀主ノ神の御事を訛り伝へ奉れる古仙の遺説」とし、「木公東王父と云は此ノ神を申し天真皇人も此ノ神の所使ならむ」という。(二)「真一の道」を内容とする「真一五芽之文」の経文を峨嵋山に住む天真皇人から授かるのであるが、この天真皇人とは実は青童君にほかならない。篤胤は「形を守り悪を

却くは、則ち独り真一あるのみ」(葛洪『抱朴子』地真篇)を引用し解説する。この「真一の道」こそ、黄帝(あるいは篤胤)の求めた道であろうか。(三)唐土の神仙界の神々は、「神仙界の總司」である大圀主神がその御子を派遣したものであり、神名の相違は古説の訛伝にすぎない。

#### 所謂神基督習合神道をめぐる一考察

三ツ松 誠

石田一良によれば、平田篤胤は宣長の古学神道をキリスト教と習合させ、一神教的・来世教的で倫理的な色彩を持つ神道へと変貌させた。これが神基督習合神道と呼ばれるものであり、その議論は一部門人には引き継がれるものの、国家神道には引き継がれなかったという。神道を「思想の着せ替え人形」と呼んで、それぞれの時代の最新思想を身に着けてきたものと見做し、その一類型として「神基督習合神道」なる概念を提起した石田説がそのまま広汎に受け入れられるものかどうかはさておき、村岡典嗣における発見以来、キリスト教思想が国学思想に与えた影響の如何は、日本思想史上興味深い論点で有り続けていることは間違いない。本報告は、この問題に関するこれまでの議論の方向性を概観するとともに、今後の可能性について聊かの私見を述べるものである。

議論の出発点にあるのは、篤胤説の特徴を来世的信仰と創造神の觀念に認め、それを「本教外篇」における漢籍の天主教教理書受容を根拠に、キリスト教の影響によるものと見た村岡典嗣による議論である。こうした篤胤やその流れを汲む神道家に

村岡は、「我が国の思想史上頗る注意すべき、独自の神学的哲学的思索の試みや、特殊の思想的発展の歴史」を認め、そこに存在した思想的発展の可能性を惜しんでいる。

篤胤におけるキリスト教のかかる影響については、その後伊東多三郎や海老沢有道らによって研究が深められ、子安宣邦らに至るこれを強調する研究の流れがある一方で、三木正太郎らのようなこれを強調しない論者もあつて、立場が分かれている。篤胤の死後審判に関する議論が、『鬼神新論』・『靈能真柱』と、『本教外篇』・『古史伝』とで、相違があることが、この立場の違いと関わっている。

ところが近年、平田家資料の調査に基づく宮地正人や吉田麻子の研究が登場し、篤胤における西洋イメージの再評価や、諸本検討を踏まえたテキスト分析の必要性が意識されるようになった。篤胤学におけるキリスト教の影響も、「本教外篇」の諸本検討に基づいて研究を進めるべき段階にあるように思われる。

村岡はまた、佐賀藩の南里有隣も同様の視点から論じている。福善禍淫を認めて来世教的性格を徹底させ、また神の愛を強調した有隣説を、宗教的発展として高く評価するとともに、その背後にやはりキリスト教思想の影響を見た。その論拠が「神理十要」におけるプロテスタント教理書『天道溯源』の受容である。

その後、戦時下の諸研究は有隣におけるキリスト教思想の影響を無視し、戦後の吉田寅による『天道溯源』受容の実証も有隣そのものを論じたものではなかった。長い研究の停滞を打ち

破ったのは、前田勉による、有隣の記紀注釈の紹介、また「神理十要」と『天道溯源』の比較分析——有隣に受容できなかったのがキリストの復活と信仰義認論であることが明らかになった——である。篤胤研究同様、資料調査に基づくテキスト分析によって研究の進展が展望されているのである。

その点を強調するべく最後に、これまで存在が知られてこなかった有隣の著作を紹介した。

堀秀成の思想と行動——平田派国学者の視点から——

小林 威朗

本発表は明治維新以後、宣教使・教導職として活躍した堀秀成について、特に明治維新以前からの連続性に注意を払いながら、その思想と行動を明らかにするものである。

先行研究を概観すると、まず膨大な著書の紹介するものがあり、その後河野省三による著述分類が行われている。その後の研究はその枠ないで研究されているように思われる(例えば、講釈師としての側面、和歌に依る教化とその内容)。また近年、錦仁による日記の分析が進められている。しかし、いずれの研究においても常世長胤が『神教組織物語』において述べた「堀氏ハ稚キ時ヨリ身持悪キ為古河藩ヲ脱シタル後ハ軍談ナドヲセシ人ナレバ、講義ハナレテ上手ナリ」という評価の影響を強く受けており、この評価自体を問い直した研究はないように思われる。また、堀の思想の根幹であると考えられる古典解釈(神道思想)についても言及している研究は管見の限り見当たらない。